Journal of Sociology & Social Work, 2023;No.2, p 55-65

資　　料

弁解内容の違いが弁解効果に及ぼす影響に関する実験室実験

山川　　樹[※1]・坂本　真士[※2]

要旨：「うつ病暗示」とはうつ病に罹患している可能性を示唆する発言のことである。本研究はうつ病暗示の弁解効果を実験室実験で検討した。実験計画は弁解内容と測定時点を独立変数とする二要因混合計画とし、参加者がもう一人の参加者のふりをした実験協力者と１週間の期間を空け２度交流する点が特徴であった。弁解内容はうつ病暗示条件、遊んでいて忘れたと発言する不注意条件、何も弁解発言をしない統制条件の３水準を設定し、測定時点は初対面後と弁解後の二時点とした。57名の女子大学生が実験に参加し、各時点における気分及び協力者に対する印象が測定された。実験の結果主に示されたのは、いかなる弁解でも失敗直後は印象の悪化を防げない可能性、何も弁解をせずとも参加者は合理的な理由を推測している可能性、初回の失敗に対しては理由に関わらず寛大に対応される可能性の３点であった。考察では先行研究との結果の異同について議論した。

キーワード：弁解、自己呈示、抑うつ、大学生、サクラ

Ⅰ．問　題

１．目的

弁解（excuse）は社会心理学研究において防衛的自己呈示の一種に位置付けられている[1)]。Schlenker[2)] は、社会的相互作用の過程で人が維持すべき印象に対して望ましくない意味合いを持つ事態が発生し、他者によってその人に責任があると判断される可能性のある場面を社会的苦境（social predicament）と定義した。防衛的自己呈示とは社会的苦境を予期、あるいは経験した人が、自分の印象をそれ以上傷つけないようにしたり、少しでも良い方向に変えようとしたりするためにとる行動を指す。そしてその防衛的自己呈示の一種である弁解は、否定的な結果の原因帰属を自己の中核的な部分から逸らせようと動機づけられた過程[3)] と定義されている。すなわち人は、社会的相互作用の過程で望ましくない事態が発生し、他者からその事態に対する責任があると判断される可能性を予期あるいは経験した際、自分の印象をそれ以上傷つけないようにしたり、少しでも良い方向に変えるための手段として弁解を行う。

弁解を行った効果は、何を理由として提示するか（すなわち弁解内容）によって左右される。もし弁解内容が適切であれば（good excuse），弁解された者（以降，被弁解者とする）が弁解した者（以降，弁解者とする）に抱く良い印象

※1　東北文化学園大学現代社会学部現代社会学科
※2　日本大学文理学部

の維持[4]や，ネガティブ感情の抑制[4]，被弁解者が弁解者に対して行おうとする罰や叱責の抑制をもたらす[5]。一方，弁解内容が不適切（bad excuse）だった場合は，適切な弁解をするよりも否定的な印象を抱かれたり，罰や叱責を重く見積もられることがあることも示されている[4,5]。それだけでなく，時には弁解を何もしない場合よりも悪い評価がもたらされることも示唆されている[5]。このようにこれまで多くの研究が弁解のもたらす対人的な影響について検討している。

しかし、先行研究には主に２つの課題が残されている。１つ目に挙げる最大の課題は先行研究の多くが場面想定法を用いた質問紙実験であるということである。一般に場面想定法ではビネットと呼ばれる特定の状況を描写した短い文章を参加者に提示する。そして「もしあなたがそのような場面を経験したら、どうしますか」と仮定した中で様々な質問や心理尺度に回答を求める[6]。このような質問紙実験は質問紙調査と同様のコストと規模で実施できるため、比較的容易に大量のデータを得られるという利点がある。しかし、参加者がビネットを読んで想像しながら考えた回答と実際に体験した際の行動が必ずしも一致するとは限らないと言う生態学的妥当性に関わる問題を抱えてもいる。したがって実験室実験など実際の対人場面でも質問紙実験と同様の結果が得られるのか確認する必要がある。

２つ目の課題は弁解効果に関する先行研究が行った実験室実験にある。実際の対人場面で弁解効果を検討した数少ない研究として Weiner et al.[4] の研究がある。Weiner et al.[4] は「第一印象に関する実験であり、もう一人の参加者と共同して作業してもらう、５分から10分程度で終わる簡単な実験である」と称して参加を募った。しかし実際に参加者と共同作業をするパートナーは実験者が用意した実験協力者（サクラ）であり、サクラは集合時間に15分遅刻してやってくることになっていた。そして遅刻してきたサクラが条件ごとにことなる弁解をするという研究であった。この実験の結果、適切な弁解をした場合、不適切な弁解をしたり何も弁解をしなかった場合よりも弁解者にとって望ましい効果をもたらすことが示された。しかし、日々の暮らしの中で弁解が行われる状況を考えた場合、初対面の状況だけでなく既知の人間関係の中でなされる弁解も扱うべきであろう。

既知の人間関係の間における弁解効果を扱う必要性を示す一例として、「新型うつ」現象[注2]が考えられる。新型うつとは1990年代後半頃から抑うつを訴える社員の特徴が従来典型例と考えられていた抑うつとは異なる特徴をもつことに対してマスメディアが名付けた名称である。例えば、端から見たらうつ病の患者とは思えないような行動（例：休日に活動的に過ごしその様子をインターネット上に公開する）をする人が、職場にはうつ病の診断書を出して休職するため、同僚からはうつ病を不都合に対する弁解としているのではないかと不信感をもたれているという報告がある[7]。このような不調を訴える者とそれを取り巻く者の間に軋轢が生じる一因としては、弁解ともとれる発言が職場の同僚という既知の関係の中で用いられていることも影響していると考えられる。よって自分と無関係の他者がした弁解や関係がその場限りの相手の弁解だけでなく、既知の人間関係の間における弁解効果も検討する必要があるだろう。

その点で山川・坂本[8) 9]はうつ病であると公言することが周囲にとって勤務できないことの弁解として機能している可能性について場面想定法を用いて検討している。山川・坂本[8) 9]はうつ病の症状を一切示していない人物が失敗した状況で「自分はうつ病だと思う」という防衛的自己呈示（i.e., 弁解）することをうつ病暗示と定義した[8]。そして一緒に作業している同僚が自分の役割を果たさなかったという社会的苦境を描写したビネットを呈示しうつ病暗示が弁解としてどのような効果をもたらすか検討した。その結果うつ病暗示は適切な弁解と不適切な弁解の中間程度にポジティブな効果をもたらすことを示した[8) 9]。また，質問紙調査および質問紙実験によってうつ病暗示は心理的障壁が高いと評価される特徴をもつことも示されている[12]。しかし，うつ病暗示の弁解効果は未だ実験室実験によっては検討されていない。

そこで本研究では既知の関係性の間でなされるうつ病暗示のもつ弁解効果を実験室実験に

よって検討することを目的とした。具体的にはまず参加者と実験協力者が初めて対面した時点で参加者の実験協力者に対する第一印象やその時の感情状態を測定する。そして２度目の対面時に実験協力者を社会的苦境に立たせる状況を用意し実験協力者は弁解を行う。その後、弁解をされた参加者が実験協力者に対して抱いた印象やその時の感情状態を測定する。この際、弁解をしない条件（統制条件）や弁解の内容が異なる条件（具体的には、不注意を弁解とする不注意条件）を設けることで、初対面時からの印象の悪化の程度や弁解による緩衝効果を検討することができると考えられる。

そして先行研究の知見に基づいて本研究では以下の様な仮説を立てた。まず Weiner et al.[4] は弁解の効果は質問紙実験でも実験室実験でも同様の結果が得られることを示している。本研究とは初対面状況か否かという違いがあるものの、結果の出方を大きく逆転させるほどの違いではないと考えられる。そのため本研究でも山川・坂本が示したように、中程度の弁解効果をもつうつ病暗示条件は不適切な弁解である不注意条件や弁解をしない統制条件よりもポジティブな影響を弁解者にもたらすだろうと考える。ただし、弁解者に抱かれる印象が弁解前後でどのように変化するかを検討した先行研究はないため、測定時点の変化については探索的に検討する。

２．用語の定義

弁解は Tedeschi & Norman[1] による自己呈示行動の分類に基づき、「社会的相互作用の過程で維持すべき印象に対して望ましくない意味合いを持つ事態が発生し、他者からその事態に対する責任があると判断される可能性を予期あるいは経験した際（i.e., 社会的苦境場面）、自分の印象をそれ以上傷つけないようにしたり、少しでも良い方向に変えようとしたりするための自己呈示行動」と定義した。

そしてうつ病暗示は Yamakawa & Sakamoto[8] に基づいて、「社会的苦境場面において『自分はうつ病だと思う』と発言すること」と定義した。

Ⅱ．方　法

１．実験計画

本研究は３（弁解内容：統制，うつ病暗示，不注意）× ２（測定時点：弁解前・弁解後）の２要因のうち，弁解内容を参加者間要因，測定時点を参加者内要因とする混合計画であった。

２．実施期間

本研究は2013年11月から2014年７月の間に行われた。

３．実験対象者

実験対象者は女子大学生とし３つの条件（統制条件，うつ病暗示条件，失念条件）のいずれか１つへ無作為に割り振った。対象の性別を女性に限定したのは弁解者と被弁解者の性別の組み合わせによって交絡が生じることを防ぐ目的であった。これまで弁解の先行研究で性差の効果は報告されていないが、弁解効果を実験室実験で検討した Weiner et al.[4] は弁解者と被弁解者を同性に統制していた。そこで本研究も先行研究にならい、参加者と実験協力者の性別を揃えることとした。

４．実験協力者

実験操作を行うために女子大学生５名（平均年齢21.00歳，SD = 0.63歳）が交代で実験協力者の役割を果たした。協力者間の言動及び、外見的特徴はマニュアルを作成し可能な限り統制を図った。なお、協力者が実験操作を行う手続き上、協力者は実験の目的を知っていた。

５．弁解効果の指標

本研究では Weiner et al.[4] に倣い、弁解効果の指標として感情、弁解者に対する印象（認知的側面）、弁解者との関係性の継続（行動的側面）の３つを用いた。

怒り感情の評定　Weiner et al. [4] は，実験操作によって最も影響を受けやすい感情は怒りに関する感情であることを示唆した。そこで本研究でも感情に関する指標として怒り感情を測定した。具体的には、短縮版多面的感情状態尺度[13] の下位尺度「敵意」の５項目を使用した。今現在の感情について「全く感じていない（１点）」、「あまり感じていない（２点）」、「少し感じている（３点）」、「はっきり感じている（４点）」の４段階で評定した。また，フィラー項

Table 1　実験で使用した印象評定尺度項目

1.	成熟した	—	未熟な	*
2.	不真面目な	—	真面目な	
3.	不誠実な	—	誠実な	
4.	強い	—	弱い	*
5.	好ましくない	—	好ましい	
6.	協調的な	—	自分勝手な	*
7.	有能な	—	無能な	*
8.	信頼出来ない	—	信頼出来る	

注）* 記号の付いた項目は逆転項目である。

目として同尺度から「倦怠」「活動的快」「非活動的快」の４つの下位尺度各５項目を合わせて提示した。

弁解者に対する印象　Yamakawa & Sakamoto[9] が使用した弁解者の印象を評定する12項目の中から、本研究の実験場面に適用可能な８項目を使用した（Table 1）。なお，これらの印象評定項目は弁解効果の測定に特化した項目であるため、純粋に対人印象を測定する項目として見た場合、内容に偏りがあると思われた。そこで参加者に回答を求める際に不自然ではないよう大橋・三輪・平林・長戸[14] の特性形容詞対20語をフィラー項目として提示した。回答は大橋他[14] の形式に合わせ両極型の７段階評定（1－7点）で行い、得点が高いほど良い印象を抱いていることを意味するように得点化し印象得点とした。

弁解者との関係性の継続　弁解効果の行動的側面の指標として、弁解者との関係の継続を望むか（関係の継続性）を測定した。具体的には、失敗をした実験協力者と再び一緒に実験をしたいと思うかという問いに「はい」か「いいえ」の２択で回答を求めた。また、関係の継続性に関する判断と実験自体に再び参加するかどうかの判断を区別するため、まず「もし日を改めて実験をやり直すとしたら、もう一度実験に協力してもらえますか」と尋ね、再び参加しても良いと回答した参加者にのみ関係性の継続の測定を行った。

６．手続き　実験は第１セッションと第２セッションの２度に分けて実施された。第２セッションは第１セッションから丁度１週間後に実施された 。各セッションの所要時間は第１セッションが約20分、第２セッションが約30分であった。全ての参加者は事前に「協同作業においてパートナーの視覚的情報が課題成績に及ぼす影響を調べる研究」であり「１週間程度の期間を空けて２度実験に参加する必要がある」と告げられて実験に参加した。

第１セッション　参加者が実験室に到着すると、まず個別に部屋へ案内し実験の説明を行った。そして実験の目的を説明するとき，全ての参加者に「あなたはパートナーの外見的特徴を排除する条件に割り当てられた。そのため、もう一人の参加者（実際は実験協力者）とはカーテン越しに会話をしてもらう」と教示した[注3]。その後、現在の感情を測定する質問票への回答を求め、回答が済み次第、協力者が待機している隣室へ移動した。実験室の俯瞰図を Figure １に示した。参加者と協力者は最初にカーテンを開けた状態で対面し、お互いに苗字と学年を告げ自己紹介を行った[注4]。このとき協力者は「サトウ」を名乗り[注5]、学年は参加者と同じ学年に揃えた。参加者と協力者が自己紹介をした後、実験者はカーテンを閉め、第２セッションの日程を確認すると一時退室した。そして参加者と協力者は２人で第２セッションまでの宿題として課される課題のテーマ決めと、担当箇所の分担を行った。なお、課題テーマの候補は予め３つ用意されており、参加者と協力者は相談

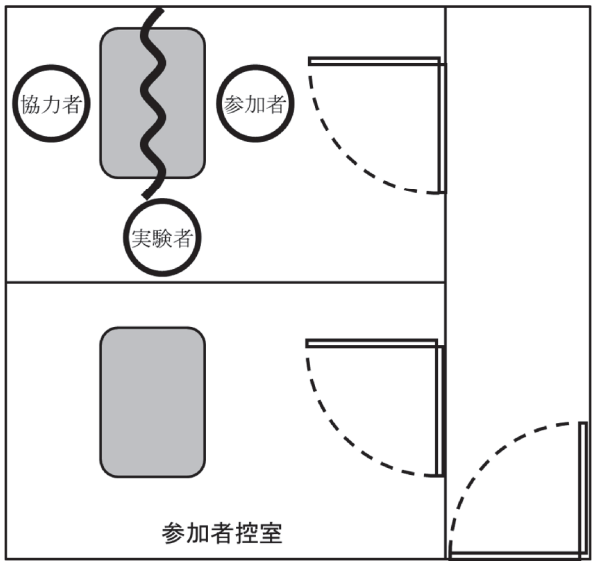

Figure 1　実験室の俯瞰図

をして３つの中から１つを選択した。課題はいずれもあるテーマに関するメリットとデメリットを考えてくるものであった。参加者と協力者はテーマを選択した後、メリットとデメリットの担当を分担した。実験者は参加者からテーマと分担が決まったと告げられた後、再び入室しテーマと分担を確認した。協力者と参加者に確認がとれたら第１セッションにおけるインタラクションは終了であった。参加者は最初の部屋へ戻り、感情状態と協力者の印象を評定する質問票に回答し第１セッションを終了した。

第２セッション　第１セッション同様、まず参加者は個別に部屋へ案内され、感情を測定する質問票へ回答してから協力者の待つ隣室へ移動した。第２セッションでは初めからカーテンを閉めていた。参加者と協力者が揃うと、実験者は課題の提出を参加者から順に求めた。参加者が課題をやってきた事を確認した後、協力者へ課題の提出を求め、この時に実験操作を行った。協力者は全ての実験条件で「やろうと思ったけどできませんでした」と発言した。その後、何かあったのかと尋ねる実験者に対して協力者は条件ごとに以下の対応をとった。うつ病暗示条件では「うつ病だと思います」と発言し、不注意条件では「遊んでいて忘れてしまいました」と発言した。そして統制条件では何も発言しなかった。実験者は慌てた素振りを見せながら「どうするか考えるので隣室で待機して欲しい」と参加者に告げ、参加者を最初の部屋へ移動させた。その後、協力者が課題を持ってきてこなかったことはあくまでアクシデントであったと参加者に思わせるため、実験者は参加者が待機している部屋の外で善後策を考える演技を続けた。しばらくしてから、実験者は申し訳無さそうな素振りで参加者の待機する部屋へ入り「残念ながら、課題が揃わなかったので今日予定していた実験は中止せざるを得ない」こと、そして「実験を完遂できなかったため、謝礼を渡すことができない」ことを告げた。その後、「もしよかったら参考のために」と称して感情状態と協力者の印象を測定する質問票への回答を求めた後、弁解効果の行動的側面として協力者との関係性の継続について尋ねた。参加者の回答が得られた時点で実験の終了を告げ、本来の目的等をディブリーフィングした。全ての参加者は謝礼として1000円分のQUOカードと4GBの容量をもつUSBメモリを受け取った。

７．統計解析

分析には統計ソフトR[17]のバージョン3.2.0を使用した。分散分析にはRの関数であるANOVA君version 4.6.2を使用し、多重比較には修正Holmの方法を用いた。また標本標準偏差の算出のためにR用パッケージrpsychi[18]を使用し、α係数の算出にはpsych[19]を、効果量の信頼区間の算出にはMBESS[20]を使用した。全ての有意水準は$\alpha = 0.05$とした。

Ⅲ．結　果

実験終了後に実験の真の目的に気づいていたと報告した5名及び、実験実施や質問票への回答に不備のあった２名の計７名を除外した。最終的に女子大学生57名（平均年齢19.11歳，*SD* = 0.85歳）を分析対象とした。

分析に使用した変数の記述統計量を条件別にTable 2に示す。印象得点は第１セッションで測定した結果を弁解前の印象、第２セッションの実験操作後に測定した結果を弁解後の印象とした。また、怒り得点については、第２セッションの始めに測定した結果を弁解前怒り得点とし、実験操作後に測定した結果を弁解後怒り得点とした。内的整合性を確認するため条件別に各変数のCronbachのα係数を算出した結果、いずれの変数においても十分な値が示された（αs> .79）

弁解内容によって弁解前後の弁解者への印象の変化量が異なるかを検討するため、実験条件と測定時点を独立変数とした３×２の２要因混合計画に基づく分散分析を実施した。実験条件は参加者間要因、測定時点は参加者内要因であった。その結果、測定時点の主効果（F (1,47) = 273.75, p < .001, η_p^2 = .85, 95%CI [.77, .89]）と、弁解内容と測定時点の交互作用（F (2,47) = 3.72, p < .05, η_p^2 =.14, [0, 0.30]）が有意であった。単純主効果の検定の結果、全条件で弁解後は弁解前より印象得点が有意に低かった（うつ病暗示条件：F (1,16) = 57.06, p < .001, η_p^2 = .78, [.50, .87]; 不注意条件：F (1,15) = 203.82, p < .001, η_p^2

Table 2　条件別記述統計量

	うつ病暗示条件 (n = 17)				不注意条件 (n = 16)				統制条件 (n = 17)			
			95%CI				95%CI				95%CI	
	M	*SD*	*LL*	*UL*	*M*	*SD*	*LL*	*UL*	*M*	*SD*	*LL*	*UL*
印象得点 [a]（弁解前）	44.59	4.96	41.96	47.22	44.50	4.70	41.91	47.09	41.53	5.24	38.75	44.30
印象得点 [a]（弁解後）	28.29	7.88	24.12	32.47	23.75	4.49	21.28	26.22	27.59	5.19	24.84	30.34
怒り得点 [b]（弁解前）	5.47	1.14	4.86	6.08	5.69	1.49	4.87	6.51	5.24	0.73	4.85	5.62
怒り得点 [b]（弁解後）	8.35	3.71	6.39	10.32	9.06	3.31	7.24	10.88	7.06	2.65	5.66	8.46

注）CI = 信頼区間 ; LL = 下限 ; UL = 上限をそれぞれ意味する。
印象得点は高得点ほど好意的な印象を持っていたことを表し，怒り得点は高得点ほど怒りを強く感じていたことを表す
[a] 得点可能範囲は８―56点である。
[b] 得点可能範囲は４―16点である。

= .93, [.82, .96]; 統制条件 : F (1,16) = 74.99, p < .001, η_p^2 = .82, [.59, .89])。また、弁解後の印象得点は条件間で有意傾向の差が認められた（F (2,47) = 2.50, p < .10, η_p^2 = .10, [0, .25])。そこで、多重比較によって弁解後の印象得点を条件間で比較したが、いずれの条件間でも有意な差は認められなかった。うつ病暗示条件と不注意条件の差は調整済み p > .13（Hedges's g = .68)、統制条件と不注意条件の差は調整済み p > .17（Hedges's g = .76)、うつ病暗示と統制条件の差は調整済み p > .74（Hedges's g = .10）であった。弁解前後の印象得点の条件ごとの変化をFigure 2に示した。

次に、怒り得点を従属変数として、印象得点と同様に２要因混合計画に基づく分散分析を実施した。その結果、測定時点の主効果は有意であった（F (1,47) = 33.41, p < .001, η_p^2 = .42, [.20, .57])。しかし弁解内容の主効果（F (2,47) = 1.77, p < .19 η_p^2 = .07, [0, .21]）及び交互作用（F (2,47) = 0.96, p < .39, η_p^2 = .04, [0, .16]）は有意でなかった。

最後に失敗をした実験協力者と関係の継続性を望むか尋ねた結果について検討した。まず、日を改めて実験に参加可能かを尋ねた結果、うつ病暗示条件と統制条件の参加者各１名ずつは、予定が合わないため参加できないと回答した。そして、残る48名の参加者のうち、実験のパートナーの変更を希望したのは、うつ病暗示条件の１名のみであった。すなわち、実験に再協力が可能と回答した残る47名は、条件に関わらず再び同じパートナーで良いと回答していた。

Ⅳ．考察

本研究の目的はうつ病暗示の弁解の効果を、実験室に再現した既知の対人場面において検討することであった。最初に印象得点、怒り得点をそれぞれ従属変数とした分散分析の結果について考察した後、弁解効果の行動的側面として尋ねた関係の継続性に関する質問に対する回答について考察する。

まず印象得点を従属変数とした分散分析の結果について考察する。この分析結果を考察する際の要点は主に２点あるだろう。第１に全ての条件において弁解前より弁解後の方が印象得点は低下していたこと、第２に弁解後の印象得点では、条件間に有意な差が認められなかったことである。まず、分散分析で測定時点の主効果が有意であった結果は、弁解前（初対面時）よりも弁解後（課題をやってこなかったために実験が中止になった時）で、参加者が協力者に対

して抱く印象が悪化したことを意味している。Weiner et al.[4]は初対面場面での弁解効果の違いを検討していたため、弁解前後の変化は検討されていなかった。本研究では、参加者と弁解者役の実験協力者が失敗前に相互作用をもつ状況を設定したため、第1印象からの変化を検討することができた。そしてその結果、いかなる弁解をしようと失敗をしたことによる印象の悪化そのものは免れない可能性が示された。これまでは、弁解のもたらすネガティブな効果として弁解し続けることで他者から愚かな人間とみなされて疎んじられる可能性が指摘されていた[21]が、本研究では更に、弁解は失敗したことによる悪影響を清算できるほどの効果をもたない可能性が示された。

印象得点を従属変数とした分散分析の結果を考察する第2の要点は、弁解後の印象得点は、条件間に有意な差が認められなかったことである。本研究では先行研究の結果[8)9)]に基づいてうつ病暗示条件は不注意条件および統制条件よりもポジティブな影響をもたらされると仮説を立てた。しかしこの仮説は支持されなかった。

このような結果が得られた一因として、実験操作後の統制条件の印象得点が予想ほど悪化しなかったことが考えられる。そこでこの点について、実験後に参加者から聴取したインタビューの内容に基づいて考察を行う。実験終了後に参加者に対して、パートナー（実験協力者）が課題をやって来ていないと聞いた時、どのように感じたかインタビューを行った。その結果、協力者が何も理由を述べなかった統制条件に割り当てられた参加者から、「責任感がないと思った」といった弁解者を非難する感想が得られた一方で、16名中8名からは「忙しくてわすれちゃったのかな、課題用紙を落としちゃったとか」や、「時間がなかったのかな」、「色々理由を考えた」といった感想が得られた。つまり、理由が明確に示されなかったことで、参加者側が独自に理由を想像していた可能性があった。Scott & Lyman[22]は、一切の釈明を行わないことで責任の追求を逃れようとすることを「メタ釈明（Meta-accounts）」と呼び、その1つの形態として「神秘化（Mystification）」を挙げている。そして神秘化とは、理由はあるがそれを明かすことはできないと宣言することであると述べている。本研究において統制条件の実験協力者は一切の発言をしなかったため、Scott & Lyman[22]が指摘するような厳密な神秘化とは異なる。しかし、何の理由も明示しないという実験協力者の対応が、結果的に参加者に対して神秘化として機能していた可能性は否定できない。

なお、うつ病暗示条件と不注意条件間の印象得点の差については、概ね先行研究と同様の結果であった。本研究において上記2つの条件間では、有意差こそ認められなかったものの、効果量は $g = .68$ と中程度の値が確認された。そしてこの効果量は先行研究で得られた値（$g = .60$）と同程度の大きさである。このことから、弁解内容の違いによる弁解効果の差は、質問紙実験でも実験室実験でも同様の結果が得られることが示唆された。

次に、怒り得点を従属変数とした分散分析の結果について考察する。怒り得点では、測定時点の主効果のみが有意であり、全ての条件において弁解前よりも弁解後の方が有意に怒り得点が上昇していた。この結果はつまり、実験協力者が担当の課題をやってこなかったことが発覚したことで、参加者は怒りを経験したことを意味している。そして弁解内容間に有意な差が認められなかったことは、印象得点の結果と同様に怒り感情においても、弁解には弁解者の失敗に起因する被弁解者の怒りを解消するほどの効果がないことを示唆している。

加えて、弁解後における条件間の怒り得点では、有意傾向差さえ認められなかった。Weiner et al.[4]の実験の結果では、適切な弁解をされた参加者は、不適切な弁解をされた参加者及び何も弁解されなかった参加者よりも、有意に肯定的な感情を経験していた。また、下手な弁解をされた参加者と何も弁解をされなかった参加者の間には、有意な差が認められていなかった。ただし、Weiner et al.[4]が不適切な弁解として具体的に用いた発言内容は、「そうしたかったから（選好）」というものであり、本研究における定義に基づけばそもそも弁解には該当しないただ不適切な発言である。Weiner et al.[4]の結果と本研究の結果を鑑みると、怒り

感情の差は最も上手な弁解と不適切な発言との間でようやく認められる差ではないかと考えられる。本研究で採用した「うつ病暗示」は先行研究によって中程度に効果的なことが示唆されている弁解内容であった。そして「不注意」は不適切ではあるものの弁解の定義に当てはまるものであった。したがって「うつ病暗示」と「不注意」の弁解としての差は、最も適切な弁解と不適切な発言[4]に比べて相対的に小さかったため、弁解後に参加者が感じた怒りに有意な差が認められなかった可能性がある。

最後に、弁解効果の行動的側面の指標として測定した弁解者との関係の継続性に関する回答結果について考察する。第２セッションにおいて実験協力者が担当の課題をやってこず、その日の実験が中止になると発覚した後、日を改めての実験実施を提案したところ、予定の合わない２名を除いた48名の参加者が再実験への参加に承諾した。さらにこの48名のうち、47名が、課題をやってこなかった協力者と再度一緒に実験をやってもよいと回答した。この結果は、参加者が弁解者との関係性が継続することを厭わなかったことを示唆している。また、弁解効果の行動的側面という観点から見た場合、弁解内容や弁解の有無に関わらず、約束を破った実験協力者に対して寛大な評価をしたと解釈できる。

このような結果となった原因として、人は他者の初めての失敗に対しては、理由に関わらず寛大に接する可能性が考えられる。他者を罰したり非難したりすることは、非難する人にとっても負担がかかることである[23]。そのため、例え実験協力者のした弁解が不適切なものであっても、参加者が相手を非難して波風を立てるより大目に見て挽回の機会を与えようという判断をした可能性がある。実際に、実験後のインタビューで参加者に対して、なぜ同じ相手ともう一度実験に参加してもよいと思ったかその理由を尋ねたところ、以下のような回答が得られた。まず統制条件に割り当てられた参加者のうち10名から「次はやってきてくれるかなという気持ちからこたえた」や、「流石に次回はやってくると思った」、「一回注意されたらやってくるだろう」といった回答が得られた。うつ病暗示条件に割り当てられた参加者のうち10名から「今回できなかったのは病気だから仕方ないと思った」、「自分が相手の立場ならもう一度チャンスが欲しいし、もしもう一度チャンスがもらえたら頑張りたいと思ったから」、「次はやってくるかなと思った」、「１回くらいならしょうがない。許す」といった回答が得られた。そして、不注意条件に割り当てられた参加者のうち11名からも「次はやってきてくれたらいいなと思ったから」、「次は絶対にやってきてくれると信じたので」、「忘れたからこそやってくるはず」、「一度のミスだから次回も同じ人で大丈夫。２度目からは嫌」といった回答が得られた。さらに、回答数自体は少数（うつ病暗示条件に３名、不注意条件に１名）であったが、「第１印象がよかったから」という理由を挙げた参加者もいた。

以上の結果を踏まえ、初対面ではない相手の初めての失敗に対して被弁解者あるいは被害者は、特に行動的な反応においては失敗の理由に関わらず寛大な対応をとることが示唆された。また、弁解内容に寄る弁解者に対する印象の違いは、実験室実験でも質問紙実験でも同程度であることが示唆された。ただし、全く弁解をしない条件（統制条件）の結果は、採用する方法によって異なる可能性がある。つまり、実際の対人場面では、何も理由を述べないことが、参加者に失敗の理由を想像させるような影響を生む可能性があった。今後は、Weiner et al. [4]のように第１印象を評価させるような手続きの中で、全く何も理由を述べない条件の影響を検討することで、本研究の結果が実際の対人場面だったために得られた結果なのか、失敗した人物と面識があったために得られた結果なのかを更に詳しく検討することが可能となるだろう。

Ⅲ．引用文献

１） Tedeschi, J. T. & Norman, N. Social power, self-presentation, and the self. In B. R. Schlenker (Ed.), The self and social life. New York: McGraw-Hill. 1985; 291-322.

２） Schlenker, B. R. Impression management: The self-concept, social identity, and

interpersonal relations. Monterey, CA: Brooks/Cole Publishing Company.1980

3） Snyder, C. R., & Higgins, R. L. Excuses: Their effective role in the negotiation of reality. Psychological Bulletin, 1988;104: 23-35. http://dx.doi.org/10.1037/0033-2909.104.1.23

4） Weiner, B., Amirkhan, J., Folkes, V. S., & Verette, J. A. An attributional analysis of excuse giving: Studies of a naive theory of emotion. Journal of Personality and Social Psychology, 1987; 52: 316-324. http://dx.doi.org/10.1037/0022-3514.52.2.316

5） Tyler, J. M., & Feldman, R. S. The double-edged sword of excuses: When do they help, when do they hurt. Journal of Social and Clinical Psychology, 2007; 26: 659-688. http://dx.doi.org/10.1521/jscp.2007.26.6.659

6） 山川樹 . コラム 4 心理学の実証的方法論：場面想定法について 坂本真士 , 編 .「新型うつ」とは何だったのか . 東京 : 遠見書房 , 2022; 119-122

7） 佐久浩子 . 5 部 2 章新型うつ社員の職場での実態と対応 坂本真士 , 編 .「新型うつ」とは何だったのか . 東京 : 遠見書房 , 2022;171-183

8） Yamakawa, I., & Sakamoto, S. Insisting on depression, but not showing symptoms: A Japanese study of excuse-making. International Journal of Psychological Studies, 2015; 7: 146-154.

9） Yamakawa, I., & Sakamoto, S. The Interpersonal Effects of Claiming to have Depression by People not Diagnosed with Depression in Social Predicaments. Japanese Psychological Research, 2017; 59: 246-253.

10） 樽味伸 . 現代社会が生む " ディスチミア親和型 " 臨床精神医学 2005; 34: 687-694.

11） Kato, T. A., Hashimoto, R., Hayakawa, K., Kubo, H., Watabe, M., Teo, A. R., & Kanba, S. Multidimensional anatomy of 'modern type depression'in Japan: A proposal for a different diagnostic approach to depression beyond the DSM - 5. Psychiatry and clinical neurosciences 2016;70 (1) :7-23.

12） 山川樹・坂本真士 .「うつ病暗示」は弁解として大学生にどのように評価されているか . 社会学・社会福祉学研究 , 2022; 1: 13-26.

13） 寺崎正治・岸本陽一・古賀愛人 . 多面的感情状態尺度の作成 心理学研究 , 1992; 62: 350-356.

14） 大橋正夫・三輪弘道・平林進・長戸啓子 . 写真による印象形成の研究 (2) : 印象評定のための尺度項目の選定 名古屋大學教育學部紀要 教育心理学科 , 1974; 20: 93-102.

15） 小川一美・吉田俊和 . 発話スタイルがパーソナリティ認知に及ぼす効果 (2) : 叙述的発話と断片的発話の比較 名古屋大學教育學部紀要 心理学 , 1999; 46: 131-139.

16） 小川一美 . 初対面場面における二者間の発話量のつりあいと会話者および会話に対する印象の関係 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学 , 2000; 47: 173-183.

17） R Development Core Team. R: a language and environment for statistical computing. Vienna, Austria: R foundation for statistical computing, 2012. Retrieved from http://www.R-project.org/

18） Okumura, Y. rpsychi: Statistics for psychiatric research. R package version 0.8, 2012. Retrieved from http://cran.r-project.org/web/packages/rpsychi/

19） Revelle, W. psych: Procedures for Personality and Psychological Research, Northwestern University, Evanston, Illinois, USA, 2015. Retrieved from http://CRAN.R-project.org/package=psych Version = 1.5.8.

20） Kelley, K. & Lai, K. MBESS: MBESS. R package version 3.3.3. 2011, http://

CRAN.R-project.org/package=MBESS
21） Shepperd, J. A., & Kwavnick, K. D. Maladaptive image maintenance. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), The social psychology of emotional and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology, 1999;249-277. Washington, DC: American Psychological Association.
22） Scott, M. B., & Lyman, S. M. Accounts. American Sociological Review, 1968; 33: 46-62. http://www.jstor.org/stable/2092239
23） Fehr, E., & Fischbacher, U. Social norms and human cooperation. Trends in cognitive sciences, 2004; 8: 185-190. http://dx.doi.org/ 10.1016/j.tics.2004.02.007

Ⅳ．謝　辞

実験に参加してくださった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。一週間という期間に加え課題の作成という負担のかかる内容にも関わらずご協力くださり誠に有難うございました。

Ⅴ．脚　注

注１）研究実施時の所属は日本大学大学院文学研究科心理学専攻であった。

注２）精神医学ではディスチミア親和型うつ病[10]や現代抑うつ症候群（Modern-type depression; MTD[11]）という概念が提案されている。しかし、厳密な医学的定義については未だ議論が交わされている最中である。そのため本研究では、比較的世間に知られている「新型うつ」という表現を用いる。

注３）これは第２セッションで協力者が弁解をする際、非言語的情報の影響を最小限に抑えることを目的としてとられた手続きである。

注４）自己紹介のときだけはカーテンを空けた状態で挨拶を行った。これは、終始衝立越しの会話を参加者に求めた小川・吉田[15]の研究において、相手が誰だか分からないことによる不安を訴える参加者がいたと報告されているためである。小川[16]は小川・吉田[15]の報告を受け、参加者の緊張を低減させることを優先して、参加者同士が顔を合わせる機会を作っている。本研究でも小川[16]の手続きに倣い、自己紹介のときだけ参加者と協力者が顔を合わせる機会を設けた。

注５）参加者の名前が「サトウ」だった場合は「スズキ」を名乗った。

Laboratory Experiments on the Influence of Differences in Excuse Content on the Effect of Excuse-Making

Itsuki YAMAKAWA, Shinji SAKAMOTO

Abstract

An “insisting on depression” statement is one that suggests the possibility that a person is suffering from depression. This study examined the effects of “insisting on depression” as an excuse in a laboratory experiment. The experimental design was a two-factor mixed design in which the content of the excuses, and the time of measurement were independent variables. This experiment was characterized by the fact that the participants interacted twice for a period of one week with the experimenter who pretended to be another participant. There were three levels of excuses: insisting on depression condition, an inattentive condition in which the cooperator said that he/she had forgotten their homework because they played games, and a control condition in which no excuses were made. The participants were 57 female university students, and their mood and impressions of the cooperator were measured at each time point. The results of the experiment showed the following three main findings: no matter what excuses the cooperator made, they could not prevent their impressions from worsening after the failure; even without any excuses, the participants may have inferred a rational reason for the failure; there was a possibility that the first failure was responded to with leniency, regardless of the reason. We have discussed the differences between our results and those of the previous studies.

Key word : excuse, self-presentation, depression, undergraduate, cooperator